

夢を焼く



呼吸の章

意味のないまま消えてゆくのは僕の呼吸

Hello Baby, I Love You

僕はただ本当の優しさが欲しかっただけなんだ。

ほら、君のその微笑み

それが僕のすべてだって、言ってもいいだろ？

たった一行でいい
ふたりは幸せに暮らしましたとき。
そんな人生がいいな

眠ることは蒼い海に身を投げ入れること

タイムマシンガンで全てのものをぶち壊し忘却の彼方へ追いやってやる！

眠れない夜はいつも
君に逢いたくて

……せめて枕をくれよ

君がいなけりや意味のないまま消えて行くのは僕の呼吸

初めましては言わないよ。

だって君は僕の描いていた理想そのものだから

つらいときはいつでもそっと抱きしめてくれる
ちいさな天使がひとりにつきひとりいればいいのにね

みんながやってるからやらないってのは、

みんながやってるからやるっていうのと変わらないんだな

ある朝、ふと目がさめたら

草花が風におどる原っぱにねころんでいて

すごく可愛いセクシーな天使が

「もう終わったのよ、お疲れさま（はあと）」

なんてニッコリいって ぼくを天使の国に連れて行ってくれたなら、

幸せだねえとおもった。

砂漠

恋人よ

君はただひとり

僕の砂漠を知ったひとだ

降り止まない雨

夜の雨は虚ろな悲しみ

降り止まない雨

冷たい雨は寂しさが募る

雨に濡れた恋人よ

どんなに君を抱きしめても

心に届かない気がして

少しだけ悲しい

Love come

君の微笑みを想う時

僕の胸は優しさに満たされる

いつまでも変わらないで

君は君のままでいて

回転少女

「あたしをみて、あたしをみて」

「見てるよ、見てる」

「そうじゃないわ、ちゃんと見て」

「ちゃんとなんて見れないよ。そんなにクルクルまわっていちゃあ」

「じゃあ回るのやめるわ。だからちゃんと見て、あたしを見てよ」

「ちゃんと見れない、だから僕も回るよ。 いいかい？ それっ」

ぼくは回った。くるくるまわった。

恋愛の章

I miss everything about you.

間違った歌をうたってた

行き過ぎる雲が ふいに僕の上を横切り
影をつくった

君の目を見た。……。

青い空が映り込んだみずみずしい眼差し

すこし眩しそうに目をほそめた
純粋なきらめきが君をつつんでいた

君はゆきしろく、ほっそりとした腕を持ち上げ、
太陽に手をかざした

やがて

雲が陽をかくし 君の体にも影が落ちる
ぼくに笑み 手をさしのべた

雲の下 あの日は幸福だった

凜とした煌めき、
透きとおったそのほそい指のいっぽんで
ぼくの腿に道をつくってゆく
膝小僧を通過して、
ゆっくりともとの道へひき返す
ぼくはとつぜんに恋に堕ち果てて
きみのそのぐんにやりと柔らかな肌を引きよせる
清楚で誘惑的なかおりに昏倒しそうなぼくを
小悪魔のまなこで石化させる
なすすべがあるはずもなく、
きみの思いどおりのぼくに成る。

お酒ほとんど飲めないんだけどね

恋人よ 君のために僕はどれだけのことがしてやれるのだろう
君の心を知るのが怖い
きっと君は僕から離れて行くような
哀しい夢を
僕はみている
なくして惜しいものなんて
君以外にありはしない
ぼくのいとしい恋人
君のためにいくら詩を書いてみても
君の愛には辿りつかないんだよね
だけど僕は書くんた、
アルコールでやさしく溶けた、この心で
君への愛の詩をいくつも

夢の中で誰かを抱いて
たとえ無限の
まぼろしだとしても

宙を見れば
次々に砕け墜ちてゆく
無数の星々

たとえこの世界が
果てしない夢だとしても
きみを抱きしめふるえていても

たえまなく
胸をつきあげる
この衝動は消せないから

きみが腕の中で
とけてしまうまで
ぼくはいつまでも眠りはしない

時を忘れ
ただ一抹の、拙い想いで
抱きしめたその手を、すり抜けるような
真似は、止めて

本当に、欲しいものはここで
肉体では、ありえない
この気持ちを、知りながら
君はひどいことをした

冷酷で残酷で不貞不貞しい君
純粹で静寂で優にやさしい君

君は死んで、再び生きたのか
それとも、君らしい君を、みてしまったのか

答えはわかっている
何もかも知っている

どこへでも飛び立ってしまえばいい
乱れた髪を直し
濡れた心を渴かしたのなら
どこへでも

君の涙はもう嫌いだから

孤独の章

どうせ君はついてこないだろう

斜めに崩れ落ちる星々の欠片
世紀末はもう終わった

彼等の行方に答えを探せば
あるもの全てがうつろいゆくようで

手を伸ばせば触れられる距離の君を
いまは遠く哀しく感じる

この哀しみに与えられる答えはいつだってなくて
僕はまるで、宇宙を漂う塵に生まれたような淋しさを感じる

いまはただ
星空に願う君の囁きを永遠にきいていたくて

斜めに崩れ落ちる星々の欠片
世紀末はもう終わった

流された小舟が
沈黙の湖を
水鏡にその身を映し
離れてゆく消えてゆく
行方は永劫に知れぬままで
罪を負ったように
哀しく重苦しく去りゆく小舟
湖面は水晶の美貌をたたえて
沈黙している ……

ああ、僕は帰ろう
あの薄暗い森に帰ろう
湖畔を忘れて罪を忘れて
落としたはずの涙は砂に溶けて
きつともう死んでしまったから

縞縞の地

地平線にみた恐ろしい静寂を
忘れられずに地に横たわり砂の音を聞いた
澄み切った星雲が憎しみを静かにかき立てれば
裏切ったお前が輝く美貌をたたえて
遙か彼方からこちらを見つめている

背後から昇った強大な太陽に
お前の砂色の髪がなぶられている
そして僕は太陽から逃げまどう影、
もしもお前がここに帰って来るつもりなら
この砂地獄とともに沈もうか

やがて僕は……

お前を諦めきれずに地平線に去りゆく
そして静寂に身を任せた。
僕は静かな砂になった。やっと風になれる
縞縞の地にサヨナラを
お前にも何か言いたかった

酔っぱらいの詩

やがて死ぬまで
詩を書こう

俺の心は弱く脆く情けなく
俺は人間のくずだろう
だけどきいてくれ
この俺の詩を読んでくれ
俺は誓う

やがて死ぬまで詩を書こう！
本気だぞ、嘘じゃないぞ、
俺は酔っちゃいねえぞ、ホントだぞ
天使が僕にいったんだ。
私に抱かれるかさもなきや
詩を書きなさいって、嘘じゃないよ

憂鬱な思い出が眠りを奪う夜
悲しみに耐えかねて首をくくるなんて
なんて人は弱くて、悲しくていつも泣いてばかりなのだろう
大人になったらもう泣かないって思っていたのに
隠れてこそこそ泣いて居るんだよ本当はね
知らないだけなんだ、強いふりばかりして
本当は弱いんだ

はるか彼方に見た、ほら、あの金色のきらきらな小鳥
今ごろは海の上を必死で飛んでいるのかな

夏の夜

ひどく静かな夜に
僕はひとりぼっちで死んで行くのが怖くて
泣き出しそうな気持ちになっても
かまわないだろう？

草むらで鳴いている
夏虫たちが鳴いている

胸に迫る、
バランスを失った心が震えている
許されるのはいつのことなのか
いつの日か僕は許されるのか

切ない音色で夜が
こんなにも暗く孤独にくれて行くのか
僕の暮らしはこんなにも
危険で怠惰で、不安定なものばかりで満ちている

僕の胸を撃ち抜くうつくしい弾丸は一体どこを彷徨っているのだろう
答えておくれ、親愛なる死に神よ

愛おしい夢よ、恋人よ
僕を見つめないでおくれ
敗残者の涙は醜いだけの汚物にすぎないから
君は両目をしっかりと塞いで、

できることなら僕を抱きしめていて欲しい
それが叶えば僕はもう欲しいものなど何もない
永遠の忘却の彼方に消えゆく僕は
そう悪いものでもない

もうもどれない

狂いかけな魂が、
かちかち音をさせる時計を、
ひどい眼で見つめている

ふり返れば、みたくもない世界にとっくにたどり着いていて
いくらわめいてみても、
誰も彼もがぼくを見下ろしている

そばにいてぼくの髪を、そつとなでるおまえが
美しい微笑を浮かべるたびに
狂いかけの魂が、束の間の幸せな夢に目を閉じることができる

——もしも、
ある朝目覚めて、お前が消えて
ぼくがひとりだと気付いたのなら
涙よりも先に……

月のある草原は風に舞っている
僕は粉々になった地球儀を抱きしめ考えている

(世界はひとつじゃない)

違う世界を求め暗い海に漕ぎ出す
違う世界を求め暗い空に翼を開く

(そうじゃない、そうじゃない)

この世界を駆け抜けて
違う世界へゆこうか

夢を、闇を、乗り越えて
光りを壊して駆け抜けるんだ

……月のある草原は
風に舞い散っている……

僕は静かに走り出す
違う世界を求め草原を裸足で駆け抜ける

涙がいくら流れても
ぼくの心は綺麗に成らない

涙の代わりに汚水を
心に染み込ませている
そんなはずなのに

ああ、月が星が
この手に届かない……

うつくしい恋人よ
永遠の誓いをしておくれ
この手を決して離さないで
いいと言うまでそばにいと

うつむいて町なかを歩き
雑踏から逃げ回る、別に奴らが怖いわけじゃない
自分自身が怖いのだ

哀しみのしみついた埃っぽいグラス
ぼくが悪いわけじゃない
俺のせいじゃない……

けれど今は痛みもきえて
時折、鈍い哀しみだけが
胸を突く

ぼくはもう冒険家には成れない

虚空

行き過ぎた思い

素通りした思い

空は溷れて見える

僕を受け容れようもしない

空は溷れている

暖かく波打つその胸に受け止めてくれない

僕の目が濁っているから

空よりも君よりも遠くへ行きたかった

今は 叶わない愛だけが

僕に巣くう 行き場所など無くて

ただ費やすだけの愛が

僕のそばにあった夢とか希望とかは

泣き喚いています、僕が弱いせいで 生きてゆけないと

死の章

僕の胸……、ただ動いているわけじゃない。

最後の場所

空に星が輝いている夜に
くっきりとした雲がゆるやかに流れてゆく
夜空は月の光りに満たされている
僕はそんな星空見上げながら
だだっ広い草原に横たわっている
季節は真夏。僕は長袖Tシャツの袖をまくり上げる
虫の声が静けさにとけ込んで、いつまでも終わらない
なにもするべき事はなく、なにも欲しいものはない
僕は胸を空っぽにして、ただ流れる雲をみている

やがて僕は目を閉じる。
このまま目覚めることのない永遠の眠りにつきたい
何の悲しみもなく、何のいらだちもなく、何も奪われない
なにひとつ変わらない永遠の世界にいだかれて
安らぎだけを感じながら眠りにつくことができるのなら……
頬をなでる風が優しい……、僕を許してくれるんだね
終わらない幸福の瞬間、絶えることのない安らぎ
どこに行けば手に入る、いつまで待てば僕のものになる
「いつでもおいでよ、待っているから」
誰かが僕にそう言っていたような気がする……

やがて僕は狂いはじめる。
どこまでもきつと限りなく
ささやかな静けさは僕のものじゃなくなる
抱いてくれる君は僕のものじゃなくなる
ためらいがちに不安だけが僕のものになる
そして僕は欲しくなる
最後の場所を夢に見る……

永遠の眠りがただ欲しいから

夢を焼く

疾走する肉体は
腐りかけの生を求めて
炎をまとい、走り続ける
一方で棺桶に打つ釘は
もうとっくにできているんだ

確かめる術などないのに
未来を創造して畏れている
愚かさを自覚してなお
疾走し続けるしかできない
悲しき肉体よ

やがて燃えさかる炎に
投げられるのだろう

悲しき肉体は今や
濁流の中、生という岩肌にしがみついた
水死体間際の必死のあきらめ人
せめて楽にと願うのみ

もう許されないのは
知っているから

肉体はうつくしい自然に
帰るのだと慰めるのにも、疲れ果て
何もかもを呪い出す
と、同時に愛を強く求める
憎しみと愛のダブルフェイスで
肉体は深い孤独に涙するのだ

腐りかけの醜い肉体で
汚い涙を流すのだ

死んでしまったあの空に

ありがとうと言った
恋人とみた星に
さよならをいった

最後に
肉体は影だけを連れて
消える

僕の鼓動は速く

終焉に向かって走り出しているみたい。

何もかもを失ってしまいたい。

後ろをみろよ、もう誰もついてこないじゃないか。

光りに向かって走るだけなんだから、楽なものさ。

ほら、傍らを歩いている猫が非道く美しく見える。

あと少しで辿り着くから。

.....
.

けれど、

世界は終わらない、たとえ青い星が終わっても、

星々がすべて立ち去っても、

黒い空は終わらない

そのとき、僕は…、

とっくに終焉に辿り着き、黒い空の塵になり果てていた。

やっとお望みの永遠を手に入れて

永遠に死に続けられる…

ゆれうごく 宵やみに
きみの その 艶やかな
黒髪を 撫でている

九月の 風を ながめ
煙草を 吹かす
ゆらり ゆらりと ただ 吹かす

よりそう きみを 抱きながら
永遠の 契りを 交わそうか
あまい ゆめに 突っ伏そうか

まどろみに 瞼を 綴じた
きみのほお 幸いを
胸にしずめる 味わわぬよう

待ちわびし 月も あがった
言葉は もう いらぬ
呼吸よ ただ 風に きえてゆけ

原爆

禍禍しい 熱風が
すべてを 奪いさった

日常を
些末な出来事を
大切な愛を
微笑を
夢を
あきらめを
怠惰を
憎しみも
喜びも
いくつかの涙も
いくつかの希望も
すべて…

灼熱の上に 灼熱を重ねた
あの日

なぎ倒し 犯し尽くし
あしたを 皆殺した

ひとは ああ ひとは残酷だ

奪われた すべては 奪われた

子供たちの楽しそうな笑い声が聞こえる
窓の外には太陽があつて、そよ風が吹いてるのに
ぼくはひとり、暗い不安を抱きかかえて
恨めしげな眼で、空を見ているんだ。
音や機械を友達にしてただ日を過ごしているんだ
涙がもうこれ以上流れないならいいのに
ぼくの胸……………、ただ動いてるわけじゃないんだ。
星くずを拾ってポケットにたくさんつめる
君の目に映る太陽はどんなふうだろう
ぼくには眩しすぎて少しつらい
君を抱いたあの月色の世界で、
いつまでもいつまでも星くずをひろって、
ひろってひろってポケットいっぱいになったらいいのに…
そうすればぼくはちっぽけな肉体をこの腕にだいて
光りに溶けて消えてゆける
後には美しい、なによりも美しい魂が残るんだ
欲しいものはもういいのさ
燃え尽きてしまうものばかりじゃないか
救いようのない素晴らしく純粋な人生だ
それは美しく誰にも汚されるはずのない美しいものだ

太陽の下で

朝、目が覚めて虚しい

月曜日も、火曜日も、水曜日も、全部

ふと、真昼に首をくくったひとを思い出す

彼は、いつも、夜遅くまで働き、昼間まで眠っていた。

そしてある日、決めたんだろう

彼は笑っていた。笑って手を振っていた。

その笑顔は照れてるような顔だったっけ

次の日、彼は目覚めて、ベランダで首をくくった。

その日は天気が良くて、すっとしたような日だった。

いったい誰が、頭上には太陽があつて、おだやかなのに、

首をくくろうなんて考えるのか

それは悲しい、ひどく悲しい魂だ

ぼくはわめいてやりたかった。彼の魂に耳があるなら、

大声で、どなってやりたかった。

だけど止めた。ぼくはしずかに泣いただけ

朝、目が覚めて虚しい

月曜日も、火曜日も、水曜日も、全部、全部

ふと、真昼に首をくくったひとを思い出す

月のある草原は風に舞い散っていた
僕は粉々の地球儀を胸に抱きしめて
願い事をしていた。

やがて胸の中で時は止まり、ぐらり揺れた。
ひとつの世界の向こう側
違う世界があるんだ

この世界を駆け抜けて
違う世界へゆこうか
夢を、闇を、乗り越えて
光りを壊して駆け抜けるんだ

月のある草原は優しい風に揺れて……
やがて夜が静かに走り出し
僕は草原を駆け抜けてゆく
疾駆しながら天を見上げる
ああ、光りまでほんのわずかだ

静かで、冷えきった部屋
思い出すのは、なぜか哀しくて泣いた僕の姿
恐る恐る掴もうとした浮き輪に裏切られ
ゆっくりと確実に海底に沈もうとしている
やがて柔らかい泥の上に横たわり
「せめて楽に死なせてくれないか」と見知らぬ魚に頼み込む
狂った僕は、もう御免だ。
誰か、なぜなのか教えて欲しい、
なぜこんなに寂しいの？
僕はどうして……
きっと全てが終わる、消滅もある意味美しい
見たい夢を見ようか、それとも誰かが抱いてくれるのかな
地球……
わからないことだらけの夜が明けようとしている

赤い花

天使を待たずに僕は旅立つ
生命の意味ならもう百万遍も考えた

天使を待たずに僕は旅立つ
流れる景色にもう未練はないから

ずっと憧れつづけていたような瞬間が
ずっと畏れつづけていたような瞬間が
僕を撃ちぬく！ 撃ちぬく！ 撃ちぬく！

目の前には哀しみの赤い花、
永遠のくだらなさ、ただ僕をなぶっている

死に神の目で見るとこの世は
醜い人間の乱痴気騒ぎさ

ただ美しきは、生命の消えゆく瞬間の赤い花
死に神と踊る狂いかけのデュエット・ソング
せめて僕の意識が消えるまで……

まず僕を消して
それから世界を消すんだ

消えゆく星々は
美しすぎて

手の中で消えゆく雪は
美しすぎて

思い出が風に乗って去って行こうとする
消えゆく魂に永遠を願うその瞬間が愛しい

時間を消して (お願いだ)
記憶を消して

叶わないなら
まず僕を消して
それから世界を……

遊戯の章

彼は言った。「言葉の遊戯だ」

I

雨の中、ひとり涙を流しても誰にも分からないから、泣けばいい、思い出が欲しいなら、答えを待たずに笑ってみればいい、声がかけても、夢が夢でも、どうせなくしたものは心にはなくて、今日が何の日か、君には分からない、そして髪が濡れる。

II

ちぎられた、心模様、書き残された一編の死に、もう一度だけと願うのは罪だろうか、答えが風に吹かれているなら僕はそれを追って旅立ちたい、血にまみれそうな明日に、君の微笑みが、ただ頭の中を掠めるんだ。

III

僕の全てが波に流されて、やがて薄暗い場所で土になるのなら、今日という日にいったい何の意味があるのだろうか、つまらない期待に、投げ出された小石、僕を取り囲む全ての者に心を求めるなんて、僕はなんて愚かだったのだろうか。

IV

掴み損ねた思い出に夢の跡地を求めよう、少女が公園で思いきり叫ぶように、僕も空に帰りたい、許されようとしているのは僕か君か分からないんだ、星空に瞬く行方しれずの星の王子様、土の匂いに安らぎを覚えない、僕たちの世界はあまりにも小さすぎて、知れることに意味はないのに、ただ流れ消えて行く眼の光りに明日を映しておくれ。

V

答えなんてないのに、ただ全ての者に轢き殺されて、ずたぼろに成った猫の死体さ、極端から極端へと地上の全ての、生き延びた者は、（ただ何かを、何かを求めて蠢いている。全ての答えを形造る、結晶に結集してただただ蠢いてるんだ。）

この終わらない世界、めくり繰る頁、安らぎは残酷な風に薙ぎ倒される、塵のような

夢のような……もう何もみえない。

サヨナラ

絶え間ない月のせい

歪んだ水の鏡が

冷たい僕の心を、静かに静かにべったりと

映し出した

金色の月がぎらぎらと

罪を欲を輝かせる

すべてがいたずらに虚無的だ

僕は虚無に狂う

金色の戦士

月の剣でリアルを切り落とし

その重い緞帳の向こうをみてやるんだ

そして、明日は死んだ。……

夕暮れ、エメラルドに溶けかかったおまえと、交わした約束

「遠く、ずっと遠くへ」

半裸の唇でそう言ったのは、まぼろし？

きっと涙をみることは、ない。そう知っていたのに

おまえの胸のしとねで眠りの天使に逢いたい そう願ったのに

ああ、そうだ。

「きっと君は来ない」

そうだったっけ。

だが、かまうものか！ 亡くしものの在処は僕がすべて知っている

鏡の部屋で、踊るおまえ、滑らかなその腿に、吐息を吹きつければ

ああ、ゆうべの約束は果たしたも同然だ

I

闇夜に映る君の姿は
僕の信じるうつくしい天使

夢の痛みに、
惨めな僕はまた傷ついて

絶望するしか能のない
くだらない自分に
安らぎの死を見るばかり

II

煌めきの日々は遠き彼方の
無限の果てに消えてしまった

涙のわけを答えるのなら
死が愛しいから

凍てつき腐りゆく体には
何もかもが虚無の霧に捕らわれて
何ひとつ僕を満たしてはくれないから

III

いくら抱きしめてみても
砂のようにすり抜けてゆく

いったいこの世界はなんなのだろう

神はどうしていないのだろう

ぼくはどうしてまだ生きているのだろう

誰か僕を許して欲しい

誰か僕を許して欲しい……

IV

涙よりも鮮やかに

心に映る 絶望の尖月よ

殴りつけた痛みも何か違う

銀色の眼で狂喜に踊り狂えば

魂の章

ただもういまは なにひとつない まっしろな空だ

かまへん

真実などないのに
繰り返すのは「探すふり」

わめいてみても全部が全部遠いゆめで
この場所で僕はあがくしかなくて
みっともないのももう構わない

僕は僕を構わない

助けてと叫ぶ気ももうない
だから叫んでも逆に構わない

それがそこでそっちにそれをの
型にはまったことももう出来ない しない

僕は死の宣告を待ち続けるだけの
死刑囚めいた日常を送っているだけで
なんにも構わない

もう芽生えた気持ちにだけ目を移し
その日その日を生きるしかない
それで全然構わない

灰

ひかりがまなざしにきえて
僕はこのまま灰になるのを待つしかないというのだろうか、
ある日「終わり」を告げられて灰になる
それだけの存在でしかないのだろうか
胸の痛みに応える声はなくても
それともただ間違っているだけなのだろうか
僕のすべてが思考がすべてが
ちがっていて
本当の答えははるか彼方ではためいていて
それともすべてが……
なにかちがう
ちがう
今日もすべてが無意味に映る
いつものように

笑う者

胸の痛みに、応える声はなくて
誰にもとどかないうたばかり、うたっている
誰にも響かない音ばかり……
風、もう止んだのか、
いや、そうじゃない、吹き荒れるほど、吹き荒れる
いくらわめいても、声は届かない場所
わけのわからない、うたばかり
足下に忍び寄る冷氣、
腹を掬われるような、絶望の音が、時々ぼくを脅えさせる
けれど、
けれど、俺は世界で遊ぶ、この体、砕け落ちる日まで
冷え切っていて、吹きすさぶ風に、殺されそうでも
ぼくは、世界で遊び、世界に死ぬ、
誰も止められない、この胸の逆流、真っ逆様に墜ち果てようと、
俺は笑う、俺自身を、この世界を、
笑う、笑い続けてやる！

光

幻想を 胸に抱いて 墜落してゆく 僕の夢

例えようのない言葉と憂鬱の味

この世界はもう何の意味も持たない

消え去る瞬間の影

僕は微塵も残さない

ある晴れた日に墜落する真っ黒な世界

やさしさとゆらぎとやさしさと

めくるめく繰り返される運動の限界

タスケテと動かす唇の遊び

わめいた頭を打ち抜いた弾痕はもうない

繰り返されるのは孤独な唄

僕が放った光は数光年先に届いたのだろうか

せいぜい抱き締めてみるさ

いいじゃないか、そこにはもう何も無い

心を殺して、憂鬱に生きるしかない場所だ

遊びはもう終わりにしよう

ああ、それはそばにはない

遠くて、とても手に触れることなどない

遠く、うつろなほど遠くに

僕の果てがある

それは、もう、二度と僕の手には戻らない

愛を下さい

僕のすべてが雨のように

降り続いて、そして流れて
やがて、何にも見えなくなって

君のほほえみを抱き寄せることも
打ち震える肩にそっと手を触れることも

何もかもが滅亡して ただ灰になって

空虚すぎるんだ ただ胸が渴いて空っぽで
砂を嚙んでるような苦い思いだけが支配的で

「もう二度とない」 それを繰り返すばかりで
何もしないで ただ転がっているだけで

僕の胸に優しく降り積もるひとひらの涙さえも
ぼくは汚して 踏みにじるようなざまで

いつまでも声が出るわけでもなく
前をみつめ ただ歩くだけが出来るはずもなく

僕以外の誰がすべてをあざ笑い犯してしまうのだろうか
教えて欲しいのは僕の方だ
ほろびさりし神々よ
空白を見つめ最後の時をいつまでも守りたまえ

誘惑のダンスはもう終焉にさしかかっている
パーティはついに興ざめた

誰かが静かに問いかける
すべての終わりをみつめ
まっすぐな愛をつらぬきとおせば
君以外の誰も
君をあざけりはしない

そうしてすべての鐘がすべての街に鳴り響き
静かすぎる沈黙があたりをつつみ
雪以上の答えを僕は望むべくもない

もうそばに誰もいないのはいやだ

それ以外答えがないとしても

僕に愛を ただひとつの愛を
下さい

ただひとつの

ミラー

済んでしまえば全ては一瞬の夢で
取り返しのつかないことばかりで
いったいこの人生で何がしたいのか
それすら虚ろで
確信のひとつももてなくて
ただ滅びるだけが現実

その残骸 . . .

滅びた後に残る残骸

それが一番ぼくに似てそうだ

墜落

広がりながら燃えてゆく翼のゆめ

墜落を続けるただ中で求めていたのは甘美な思い出

落ちぶれていくただ落ちぶれてゆく肉体で

その身を炎にゆだねながら

揺らぎながら燃えてゆく血液の塊

この先、真実に到達することなどないのに

焼け落ちる眼球だけで何かを探し求めている

並んで意識

意味などない

すべてのことに意味などない

僕が歩く その運動がすべて 他はない

目の前に映るこの画像 動かしているのは

いつも僕で、他の誰でもない

この肉体に埋め込まれた この意識の不思議

そんなん考えたら死ぬの怖くなる

生きるのも怖い

孤独すぎる

誰か 可愛い女の子が入ってきてみてほしい この意識の中に

そしたらホントの意味で孤独でない気がする

でも良く考えたら可愛いとか外見はどうでもいい 意識だから

めちやくちや心が綺麗なひとがいい 慈悲深い、女神みたいなひとが

僕の意識に入って来てくれたら

一緒のことを考えたり、思い出したり

並んでこの世界を見るんだ。

平和。

夢を焼く

<http://p.booklog.jp/book/4743>

著者：松岡

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/matuokayuusaku/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/4743>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/4743>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.